復興支援について話し合う参加者ら＝13日午後、西宮市上ケ原一番町、関西学院大

災害復興学会準備フォーラム

中核は被災者支援

関学大

「日本災害復興学会（仮称）」の発足に向けた準備フォーラムが十三日、関西学院大（西宮市）で開かれた。都市防災の専門家をはじめ、阪神・淡路大震災、新潟県中越地震、鳥取県西部地震など国内各地の被災地で復興に取り組む市民らが、残された課題や教訓を報告した。

同大災害復興制度研究所が主催。「脆弱（ぜいじゃく）な階層・脆弱な地域の復興支援」をテーマに、約三十人が話し合った。

神戸市立楠高校の牧秀一教諭は、震災の影響で記憶や言語に後遺症が出る高次脳機能障害を負った教え子を例に、「震災障害者の社会復帰が課題だ」と指摘。「十二年の間に悩みは積もっている。同じ立場の人が集う場をつくる必要がある」などと話した。

新潟県の「中越復興市民会議」の稲垣文彦さんは「復興の指標は経済や人口ではない。数字では表せない『豊かさ』ではないだろうか」と強調。

震災直後の神戸に入ったという東京都の開業医青木正美さんは「東京の中心部で昼間に大規模災害が起きれば、大勢の身元不明者が出る。遺体安置などの対応はどうなるのか」と疑問を投げかけた。

同研究所の宮原浩二郎所長は「『復興』という言葉にはまだ、『開発』のニュアンスがある。被災者への支援が中核になっていない」と問題を提起した。

フォーラムは十四日、神戸市中央区の兵庫県公館でシンポジウムを開き、作家の柳田邦男さんらによるパネル討論が行われる。（紺野大樹）